

日本記者クラブ会報

第9号
1970年
11月10日発行

東京都千代田区内幸町一ノノ一
帝國ホテル東館 100
日本記者クラブ 発行
電話 591-1622、591-1623
504-1111、1112 内線五三

充実していた会員討論会

社長から若手記者までの週間行事

十月のクラブ行事は、まず二日の南ベトナム急進派仏教徒アングアン寺派の指導者チェン・ミン師の記者



会見ではじまった。僧衣で身をまとったチェン・ミン師の切々たる平和への願望は、参会者の心を打ったようだった。翌三日には中米からの初のゲストとして、エル・サルバドルのサンチェス大統領の記者会見。十五日には昼食会のゲストとして愛知外相を迎え、当面する外交の諸問題を聞いたが、首相とともに渡米する直前だっただけに、会員参加七十二名を数え、繊維問題等について鋭い質問が相ついだ。また新聞週間中の二十二日には、会員討論会と懇親会を催した。討論会は「マスコミを語る——明日の記者像を中心に」というテーマで、新聞、通信、放送から五人のデスク級の中堅記者の発言と、

新聞学会会長千葉雄次郎、シカゴ・トリビューンのジェームソン両氏からの第三者発言を中心にして、司会の入江徳郎氏（TBS ニュースキャスター）が参加全会員に討論の場をひろげるという形で行なわれた。参



愛知外相招待昼食会

加者は約六十名であり多くはなかったが、社の代表者など首脳者から局長、部長、若手記者までが一堂に会して、一つのテーマで語り合うという機会が少なくだけに、記者クラブ問題や、取材の充実した活発な提起があり、内容の充実した活発な会合になった。懇親会は案外に参加者が少なく約五十名。席上ウ・タ

ント国連事務総長から送られてきた国連年鑑、統計年鑑、人口年鑑が駐日国連代表のタンザール氏から原理事長に贈呈された。それに対して、タンザール氏が十月一杯で離任して帰国するため、原理事長から記念品を贈ってその労をねぎらった。記者クラブの活動の中で、ウ・タント事務総長はじめ国連の各種機関代表の記者会見が活気を与えてきたが、それはタンザール氏の貢献によるものだったからだ。さらに二十八日には、アメリカの未来学者ケネス・E・ボールドイング氏の話しを聞く会が開かれた。コロラド大学教授のポールディング氏は経済学を基本とした思想家でもあり、共同通信社の論説委員岸本康氏の質問に答える形で、文明後社会の問題や、現代社会が国際的同質化の方向にあり、変化の中から進歩が生まれるという原理に背反するおそれのあることを指摘。また青年群を高校や大学によって、一般

日本記者クラブ会員数	十一月一日現在
会員社	一四二社
会員数	九〇五人

社会から隔離することの危険を指摘するなど、参加者の質問にもこたえて二時間半も含蓄の多い座談をつづけた。おそらくポールディング氏の在日中の最も実のある会見だったと思われる。

三十日には国連総会の帰途訪日したカンボジャ元首チェン・ヘン氏の記者会見が行なわれた。閣僚三名を含む十一人の随員とともに現われたチェン・ヘン氏は、もっぱら質問に答える形式の会見に応じ、四十人の会員の質問に対して、一々卒直な意見を述べた。そのため一時間の予定時間が二十分も超過したが、元首は会見終了後、参会の全員と握手をかわして会場を去った。

一方映画の試写会は黒沢明監督の「どですかでん」(十四日)が好評でその他松竹・山田洋次監督の「家族」(十九日)、東宝・新藤兼人監督の「裸の十九歳」(二十六日)が次々に

行なわれて、会員の足を集めた。記者クラブも十一月一日で創立から一年を迎える。そのため決算、役員改選の総会を十二月十日に催す予定で、また当日は忘年会を兼ね一年祝賀パーティーを計画中である。

第13回企画委員会

(10月16日(金)午後4時
クラブ・ルーム)

新聞週間記念行事「マスコミを語る」討論会のすすめ方について討議した結果、外部の識者として千葉雄次郎日本新聞学会会長、サミュエル・ジェームソン・シカゴ・トリビュン東京特派員を加えること、司会は、入江徳郎氏に依頼することを決定した。なお発言者の中堅、第一線記者は五人程度とし、各自五分ぐらいずつ、冒頭に意見を述べてもらうことなどを決定した。なお十一月のプレス・ランチョンのゲストとして福田蔵相、田中自民党幹事長、訪中する藤山愛一郎氏などの名があがったが、内閣改造その他政局の変動が予想されるので、強いて決定せず、情勢の成り行きをみて決定することにした。

会員の異動

入会

(登録クラブ員)

崎谷 哲夫 東京12チャンネル参与
富田 和男 ラジオ関東報道部長
宮崎 久夫 日本農業新聞社編集局長兼
論説委員長

退会

久保清一郎 ラジオ関東報道部課長
三神 正人 東京12チャンネル制作局報道部副部長
野田 黎二 野田経済研究所主幹
今村新之助 読売新聞社社会部
山口 虔 // 渉外部
樋川 幸雄 内外タイムス社編集局長
見谷 博 毎日新聞西部本社編集局長
幸田 皓二 日本放送協会報道局通信部
河崎 斎 日本放送協会報道局政治部
竹内 理一 読売新聞社社会部長

江刺家重明 内外タイムス社編集局長
藤原 剛 毎日新聞社外信部副部長
田辺 昌雄 日本放送協会報道局政治部
石田 端 // 副部長
小八重順一郎 日本放送協会報道局政治部
高野 悠 // 社会部副部長
宮武 章三 // 通信部長
小倉 貞男 読売新聞社社会部主任
坂田 源吾 読売新聞大阪本社編集局長
真島栄一郎 読売新聞社解説部長
大橋 興山 北海道新聞東京支社社会部
滝沢 国夫 読売新聞北海道支社編集部長
犬養 康彦 共同通信社社会部次長

浅沼 克良 野田経済研究所編集局長
伊藤 敦 北海道新聞東京支社社会部
役職変更
西川外次郎 北国新聞東京支社報道部長
石川 信 東京ニュース通信社取材部長
河本 弘 ラジオ関東経営躍進本部付局長
富重 静雄 日本教育テレビ報道局長代
森丘 秀雄 毎日新聞西部本社編集局長
鈴木 義光 日本教育新聞取締役主筆編集局長

会員社住居移転
長崎新聞社 東京都中央区銀座八の九の一六
長崎センタービル

新着購入図書

マッケーグ人間管理(T・H・マッケーグ著)
未来の衝撃(A・トブラー著)
情報人間の時代(菊地誠著)
いちご白書(ジェームズ・クネン著)
初めに大悲あり(秋月龍珉著)
新選挙制度論(金丸三郎著)
日本放送年鑑一九六九年度版
(日本民間放送連盟より寄贈)
一億の生命は誰が守るか
(西日本新聞社より寄贈)

世界の記者クラブ

マニラMOPCの思い出

林 祐次
(時事通信社)

ワシントンのナショナル・プレス・クラブをよく知っている人なら、マニラのオーバシーズ・プレス・クラブがどんなものを想像することは容易だ、それというのは、このオーバシーズ・プレス・クラブ(略してMOPCと呼んでいる)が、米国のナショナル・プレス・クラブの規模と内容をぐっと小さくしたものであるからだ。

フィリピンには、MOPCのほかにも、フィリピン国内の新聞、放送、雑誌等を中心とした組織がある。MOPCとの違いは、前者が在比外国報道関係者を有力なメンバーに持っている点にある。

在比二年余の間ただ一人の常駐日本人特派員としてのMOPCの思い出は深い。それはMOPCを通じて

というよりは、MOPCがフィリピンの報道言論界の組織活動の実態を生々しく教えてくれたからだ。

フィリピン史上で初めて再選の榮譽をかちえたマルコス大統領は「政府をうごかしているのはプレスだ」と述べている。これはマルコス一流の誇張ともとれるが、全くウソでもない。フィリピン言論界のエリートというのはだいたい二十数名、こういって人達の殆んどがMOPCの代表的メンバーである、昼食事または夕食後、彼等はMOPCに顔をみせる、政府の高官連、政治、経済、法曹界の指導者達、また在比外国公館とか報道機関関係者も毎日のようにあらわれる。

この言論界のエリートたちは、大統領官邸であるマラカニアン宮殿を

始め政府枢要部門への立ち入りは自由、しかし正式の記者会見には全くといっていいほど顔をみせない。彼等は政府高官の主張をきくが、きくだけでなく勧告とか助言をする。そういつたやりとりが、その場で片付かない時、その延長がMOPCの昼めしまたは夕食となる。翌日の新聞には、その内容が彼等の受持つコラムに出る。

MOPCへ行ってみると、フィリピンの報道界がいかに自由を楽んでいるかがよくわかる。この自由はもちろん戦後の所産、こうした自由の中におかれたフィリピンの言論界がもつ影響力が大きい。時としてはこわいといった表現を使った方が実感が伴う。MOPCの大きな思い出の一つとしてとくに印象的であった実例を紹介しておこう。フィリピンという不正汚職をすぐに思い出す人が多い。一九六八年の三月と記憶しているが、マルコス大統領はじめ政府責任者達が、深刻化しつつあった諸犯罪の防止に努力と熱意を欠いているのに業をにやした六つの主要日刊紙の代表達が立ち上ったことがあった。異例な朝食会といった形で、

その会議が開かれたのがMOPCであった。考え方や肌色が違い、いがみ合いの強い新聞社の社主、編集首脳陣が、その力をプールしようという動きは全くの驚きであった。この大評定の結果が六紙共通の社説となり、一面トップという扱いとなった。インフラストラクチャー分野であげた大統領の業績は偉大であると賞めあげたあと、この社説は「現在の無秩序の中から秩序を取り戻す手段と権限を持っているのは貴下で、貴下のみがこの手段と権限を行使できる」と大統領に即時行動に出ることを迫って。その結果真先にマニラ市警の署長の首が飛び、大統領と言論界の代表からなる平和と秩序の委員会が出現した。

この時の主要日刊紙がとった行動は確かにものをいった。同時に新聞恐るべしという考えが頭の中に飛びこんできた。それは新聞ほどの程度までこの自由の行使を許されるのか、政府へのアドバイスという限界を超え干渉、参加の領域まで入るべきかどうかという点に心がはせられたらであった。

声の会員

権威あるクラブ

は会員の手で

前田 源一郎

わが日本記者クラブの名声は、このところトミに高まっている。とくに万博期間中は、来日した大物の共同会見で、われわれ専門紙が大いに紙面を飾り読者から好評をうけた。

協会に加盟していながら、出先のクラブでは専門紙と一般紙の区別があり、大臣の記者会見などに入れない場合が多く、とくに先般来日本にやってきたVIPには、会いたくても会える機会がなかった。それをクラブで救ってもらったといつてよい。原理事長ほか企画委員諸氏に心からお礼申し上げ、併せて今後ともどんなよい企画を、お願いする次第です。

ところが時として、ゲスト側が七、八名もきているのに、取材側が十名そこそこということがある。こんな時は同性のよしみか……前田氏から狩り出される。事務局の苦勞を

思うと、ほかの会合を断つても顔を出しているが、せつかく//居ながらにして情報をえられるのに、どうして参加者が少ないのか、首をかしげている。行事のない日の利用状況もいま一步……らしい。大いにクラブを利用して、内外に誇りうる、権威あるクラブに、自分の手で育てて行こう。事務局の皆さん、ご苦勞さん。

(水産経済新聞取組役)

資料ご入用の方は

お送りいたします。

エル・サルバドル中米戦争の真実

(エル・サルバドル大使館提供)

国連インフォーマーション・リリ

ーズ

国際連合—国連とは—

(国際連合広報センター)

DOCUMENTS

on Vietnam and North Vietnamese Aggression against Cambodia.

1970

(クメール共和国大使館提供)

ウ・タント氏より

図書の寄贈

さる四月に国連事務総長ウ・タント氏の記者会見を開いた時、ウ・タント氏からその記念に国連発行図書を当クラブに寄贈したいとの申し出があり、その目録を贈ってこられた。このたびその書籍が、国連本部から国連東京広報センターに届いたので、この十月二十二日新聞週間記念懇親会の席上で、同センター所長のタンザー氏から左記の図書が原理事長に贈られた。



国連東京広報センター所長タンザー氏より寄贈書を贈られる原理事長

YEARBOOK OF THE UNITED



ウ・タント氏より贈られた寄贈書

NATIONS 1967
YEARBOOK OF NATIONAL ACCOUNTS, 1968, Vol. II
ECONOMIC SURVEY OF ASIA and the FAR EAST, 1968
YEARBOOK OF INTERNATIONAL TRADE STATISTICS, 1967.
everyman's united nations.
YEARBOOK OF NATIONAL ACCOUNTS STATISTICS, 1968, Vol. I
STATISTICAL YEARBOOK 1968, 1969
贈呈書はクラブの書棚に並べてありますので、会員の皆様どうぞご自由に利用ください。

着席は前列から

小さくても紙面掲載を

報告と
お願い

企画委員長 高田秀二

クラブの理事会で、クラブの成否はいつに企画委員会の活動にかかっている、などとおどかされて以来、頭の痛いことだと思っていた。しかし、万国博開催期に当たっていたこと、日本新聞界が多年願望していたクラブの誕生ということで会員各位が予想外に協力を惜しまなかったことなどが幸いして、まずまず滑り出しの一年としては、うまく運営されたのではないかと考えている。

もちろん、帝国ホテル新本館から六月に東館(旧第二新館)に移って、倍近く広くなったとはいえクラブ・ルームも六五・五坪しかない。外人記者クラブの規模にも、なおほど遠い。だが、だんだん利用者もふえる傾向にあり、会議室などの利用もかなりあるようなので、将来の記者会館建設の準備運動としては、かなり有

効な役割りも果たしていると思う。

企画委員会の第一の仕事は、来日ゲストを迎えての昼食会や記者会見のアレンジだが、前にも書いたとおり、万博関係でゲストは多く、むしろ取捨選択に頭を痛めるほどであった。また事務局の宣伝も、新聞協会や関係官庁記者クラブの協力と相まって、かなり行き届いたので、売り込みも殺到して、四人しかいない事務局に悲鳴をあげさせるほどだった。

また、問題だった外人記者クラブとの調整問題も、意外とスムーズに運んだのはうれしかった。

われわれがいちばん心配だったのは、クラブ行事の際の出席会員数の事前は握だった。クラブ・ルームが狭く、設備もないので、多人数が予定される際には、まず会場の手当を

しなければならぬ。食事やお茶の数量予測もこれと関連してくる。

四月の佐藤首相を囲んだ昼食会は会員一六〇名。国連ウ・タント事務総長の記者会見はそれを上回る会員の参加があったが、これらを最高として、どんな記者会見でも三〇名程度は集まってもらえるという実績が出来てきたので、この面で企画委もホッとしている。

ただ、これは売り込みの会見に多いのだが、せっかく記者会見をしたのに、翌日の紙面には一行も報道されないことだ。内容次第では是非もないと思うが、できればヨチヨチ歩きのクラブのために、宣伝の意味合いから加入各社が無理しても紙面掲載していただけると、非常に助かる。

とにかく会館建設までは現状以上の魅力ある施設は望めないと思うので、クラブの存在を示す上で、会員各位の努力をお願いするしかない。

好評だったのは、映画の試写会の企画だった。芸能関係は別として、案外記者という人種は映画など見ていないらしく、こんな機会が利用されるらしい。事務局の春原氏や二人

のお嬢さんなど『呼び屋みたいですよ』と苦笑していたが、今後もうこうした催しは続けたい。固いものでも、柔らかいものでも、いいプランがあったら、どしどし企画委あてに教えていただきたい。

最後に、これは会員への申し入れだが、昼食会、記者会見などの際、先着者から最前列に着席していただきたい。前列はがら空きなのに、後から来た人のためイスを追加している図は、感心したのではない。あまりに日本的な謙譲の美徳は、仲間同志のクラブなのだから願下げにしたい。

(共同通信社常務理事)

会員証をお忘れなく

日本記者クラブの行事会合の時は、会員証をネームカードとして胸につけていただいております。これは会員相互の親睦のためと、VIPゲストの場合、入場者をチェックする護衛のためという二つの意味をもっております。会員証を胸につけるケースは会合のつど受けつけでお貸ししておりますので、会員証をお忘れなくご持参くださるようお願い致します。

ゲスト インド・アーメッド食糧農業大臣

農産物の交換を活発に



左より川合通訳、アーメッド大臣、江尻会員
委員長、ハネルジー駐日大使

昭和45年9月18日(金)
帝国ホテル(クラブ・ルーム)

私が今回日本政府のご招待によりまして日本を訪問することができたことは、大変うれしいことだと思っております。実は私は六年前一九六四年に一度日本に参っております。この間の日本の大きな変化に、大変強い印象を受けました。今回、日本にまいりまして約一週間の間に私は大阪の方博を訪問いたしました。とくに私が感心いたしましたのは、三菱館です。三菱館には、日本のりっぱな成長の姿と同時に日本の将来の姿もそこにプロジェクトされています。私はこのアイデアに非常な感銘をうけた次第です。

なお私はこの機会に、佐藤総理大臣、農林大臣、その他にお会いしました。私はインドの日印協会の会長もいたしております。その関係で、多くの友人に会う機会を得たのです。

石川(NHK) 佐藤首相との会見で経済問題などの話が出たか。

答 総理大臣を訪問いたしましたのは、いわゆる表慶訪問でございます。

石川(NHK) 農林大臣とはどのようなお話を……
答 倉石農林大臣と会って、私が印象をうけましたのは、日本の農業改良計画でした。インドでも農業改良計画はありますが、インドの場合は残念ながら研究されたものを実際に適用する面で不足があると思います。それで農林大臣と会いました時に、実績農場、パイロットプロジェクトをインドにはじめるということの可能性について日本の技術協力をえたいと申し上げたわけですね。

これに対して農林大臣は非常に協力的な意見でした。そのほか、特に日本とインドとの間で農産物の交易をもっとふやすという事についても話し合いました。

質問(朝日) 日本は現在、米が豊作で余っていますが、日本の米をインドがとり入れるというような話し合いはなかったらうか。

答 日本の余剰米のことについて大臣から話がありました。しかしインドも、緑の革命と申しまして、品種の改良とか肥料の投入とかでさいわい食料に関する限り、とくに麦は自給する態勢に達しております。米は若干不足していますけれども、だいたい食料の自給は達成されております。われわれは一九七一年の末にはおそらくインドの食料の不足は解決すると期待しているものでありまして、食料に関する限りは心配がなくなりつつあると思うわけです。

質問 先程インドと日本の農産物の交換をもっと活発にしたいといわれましたが、具体的にいうとどういう食料品を日本に希望されるのか、またどういう食料品をインドから輸出されたいのか。

答 インドからはお茶、煙草、砂糖、果物、特にマ

ンゴ、バナナ、ニラ、こういったもの、オイルケーキ（植物油の固型物）これらを輸出したい。日本からの輸出は、農林大臣の話では米だけだと伺っておりま

す。麦は日本も足りないから。
平野（読売新聞） インドの日印協会の会長として、今後のインドと日本の政治的協力の方向について伺いたい。

答 私は一九六八年以来協会の会長をいたしておりますが、この間だんだんと両国の協力というものが単に政府と政府の間だけでなく、民間の人々の間にも協力がふえていると感じるわけです。これは、インドの民間人が日本を訪問し、また反面日本からもインドに多くの方々がいかれるという事実によっても明らかです。ただ何といっても大事なことは、平和的な状況で

ゲスト 南ベトナム チエン・ミン師

ベトナム平和のために

—日本国民の理解と協力を—

私は日本記者クラブの招待を非常に嬉しく思います。私はこの機会に日本の国民にベトナム民族の非常に苦しみを記者の皆さんを通じて日本国民に知らせてもらいたいと思います。ベトナムの問題は日本の皆さん

ありまして、平和な環境がなければこういう発展はないわけです。この点われわれ日本とインドの両国が平和を導ぶということについて目的を一つにしているわけでありまして、われわれはまた、核兵器、原子力兵器に反対しているわけでありまして、原子力の平和目的の利用によって、人類の幸福に寄与することを願っているわけです。

（通訳 川合和一郎）

Fakhruddin Ali Ahmed 食糧農業大臣略歴

ケンブリッジ大学卒業、一九二八年アッサム州で弁護士、一九三一年インド国民会議に入り、独立運動に参加、四〇年入獄、五二年上院議員、五七年国連代表、アッサム州財政大臣、六六年水力灌漑大臣、教育大臣、工業開発大臣を経て現職。六十五歳。

昭和45年10月2日（金）

帝国ホテル（クラブ・ルーム）

私も、非常によく知っていることと思えます。なぜならば皆さんは、第二次大戦の苦しい経験を経験してきたからです。ですからベトナムの国民の苦しみは皆さんよくわかると思えます。ベトナム国民は、ここ三十何

年の間に日本の災害の十倍の災害をうけてきたわけですね。国連事務総長のウ・タントさんも「人類の歴史の上からみて、また、良心の上からみて、ベトナムの戦争ほど汚ない戦争、非常に残酷な戦争はないだろう」といっております。

皆さん実はベトナム戦争、またはインドシナ戦争はもっとも残酷の限りをつくした戦争です。この戦争によって、インドシナ人民の犠牲は何百万、何千万にのぼり、家は全部焼かれ、農村の農業は破壊されていまます。もっとも悲しいことはこの戦争によって東洋的な文明、とくにベトナムとインドシナ文明が破壊されたことです。この戦争は国際的な争いで、アジアの安全にも、世界の安全にも非常に危険な戦争です。

西側の新聞の統計によると、ベトナム南北の両方でうけた爆弾は一九七〇年までで一千万トン以上になっている。この爆弾による南北ベトナムの破壊は広島原子爆弾より何百倍も破かいされてきた。その破壊をうけたベトナム国民の八五%以上は仏教信者である。これを見ても私たちベトナム国民が、戦争を早く中止し、平和を樹立してほしいという希望がよくわかりだるうと思う。

仏教というものは、人類はお互いに愛すると、その原則で全世界に伝道してきた。仏教は三千年の歴史を経ており、ヨーロッパ、アジア全体で六億の信者もっている。それでも仏教は、伝道のために戦争を起したことは歴史の中で一回もない。仏教の精神は、どの国とも融和できるだろう。それによって仏教は、国家の文明、文化と混合してしまった。仏教には日本仏教、セイロン仏教、ベトナム仏教といろいろちがっているが、こうしたことは仏教が民族の文化と対立し



左よりチャン・ハン・ドン上院議員、チク・チェン・ミン師、ファンクワン・ミン・通訳、前田事務局長

ないから起こってきたことである。日本の文化は、日本の仏教と区別して考えることはできないだろうと思ふ。なぜならば日本の仏教は日本の民族の性質をもっており、仏教と日本民族の文化はわけられないだろうから……。

ベトナム仏教の歴史と、ベトナム民族の歴史は区別できないだろう。それによって仏教は、いつまでも民族の中で生きています。ベトナム仏教信者として私はベトナムの仏教を保持しなければならない。同時に私たちはベトナムの民族も保持しなければならない。私たちが仏教徒は、ベトナムの信仰的、また公平な社会の建設に努力しなければならない。その方向によ

ってベトナム仏教徒たちは、ベトナム国家の非常な苦しみと破壊を救わなければならない。現在の社会は非常に悪化してきている。ベトナムの情勢は帝国主義によってベトナム民族に災害をもたらしてきている。ベトナム戦争は、非常に複雑な状態である。一方では民族解放の戦いを、国際主義の争いにかえてしまった。国家主義と国際主義の境界線をどこまで区別できるだろう。しかしベトナム戦争は、どんな誠実さをもってしても、どんな名目、目的をもってしても、ベトナム民族の平和、国家、社会の不公平を克服することはできないだろう。ベトナムの社会は安全と平和がもたらされない原因は、ベトナムの社会が独裁的で公平のない社会だからである。いろいろな矛盾と不公平のある社会は破壊の原因であり、直接の戦争の原因でもある。そこでベトナム仏教徒は、ベトナム社会の公平と民衆運動のために立ち上がって来た。しかしベトナム仏教徒の運動は、非常にむずかしいし、妨害もあった。その運動のために、ベトナム仏教の信者数千人が現在は刑務所で生活している。それでも私たちは、仏教の運動の目的は非常に正しいと確信し、その目的はアジアとベトナムの平和に対しても貢献できるだろうと確信してきた。

ベトナム仏教はベトナム民族のものであり、ベトナムの国民の願望はベトナムの平和である。ベトナム仏教信者はベトナム社会の矛盾を克服する道をさがしている。とくにベトナム民族の矛盾と対立の解決に、若者が参加している。私たちはそれによって現在の残酷な戦争を解決できるだろう。このベトナム仏教徒の方法は、資本主義や共産主義の解決の道とは違ってくるだろう。

現在のベトナム戦局は非常に苦しく恐ろしい段階にきている。ベトナム戦争はだれでも軍の力で解決することはできないと信じてきた。ニクソン大統領もその点は認めている。結局ベトナム戦争は、政治的方法、話し合い以外に解決する道はないだろう。ベトナム仏教の信者代表として私は全世界の平和愛好者たち、日本の国民の皆さん、または宗教の指導者たち、とくに現在のベトナム戦争に直接、間接に責任をもっている人たちにあらゆる方法でなるべく早くベトナム戦争を中止してもらいたいとよびかけた。日本の仏教信者は私たちと団結して、ベトナムの国民を苦しみから何とか助け出してほしい。記者の皆さんを通じて私たちの話すことを日本の国民に知らせて下さい。

豊倉好文(日経) ただ今のお話では政治的な話合いでベトナム戦争は解決するだろうと言われたが、現在進行中のパリ和平会談をどう評価しておられるのか、またどういふテーブルの場がのぞましいと考えるのかお伺いしたい。

答 パリ会談を開いてから二年近くたったが、ベトナム仏教信者は、パリ会談が始まって以来今日まで毎日毎日パリにむかって、できるだけ早くベトナムに平和がもどってくるようにとお祈りしています。しかしパリ会談だけではベトナムの問題は解決できないだろうと考えます。けれどもパリ会談の場所は、お互いに意見を述べる、お互に考えてることを出す、その非常にいい機会だろうと思います。

豊倉 パリ会談だけではだめだというのなら、どういふ話し合いの機会を持つべきだと考えるのか。

答 パリ会談だけでは満足できないし、パリ会談だけでは解決できないという原則はもっています。けれ

どもどこの場所ですしあうかといえ、それは今の四者会談の席だろうと考えます。

松本寛（フジテレビ） 現在のチュウ政権のもとでも北側と仲直りができるとお考えかどうか。また来年の大統領選挙に、ズオン・バン・ミン将軍が出馬するという話があったと聞くが、その場合、アンクアン寺派としてはどういう態度をとるのか。

答 ベトナム問題の解決は全体の問題であって個人の問題ではないと考えます。第二の質問の一九七一年の大統領選挙における仏教徒の態度は、まだ時期が早すぎるのでわかりません。けれども仏教徒としては、一つはベトナム民族のために働く、第二はベトナム戦争を早く解決する、第三にベトナム国民が非常に信頼できる、というこの三つができればだれでも支持します。

金井喜一（朝日テレビニュース） ベトナム民族解放戦線についての仏教徒の評価、態度について……。

答 仏教徒の南民族解放戦線に対する考え方ですが、現在、彼らが武器をもって戦うのには反対です。だが都市に住んでる人には、農村の民族解放戦線のことはよくわからない。ただ彼らが武器をもって向かっていっているのはこちらに對してです。

前田（事務局） では敵として考えているのか。

答 仏教信者は、解放戦線に對して敵か味方かという考え方はしない。なぜならば仏教ははじめ話したようにお互いに愛する精神をもっているからだ。仏教徒は、政治勢力のどちらにも入らない。だから敵か敵でないか、と仏教徒は考えない。

岩村（日経） 最近のパリ会談で南ベトナム民族解放戦線のビン代表が、来年六月末までに、米軍が撤退

すれば、ベトナム問題は解決すると、いいましたが、それに対する考え方と、もう一つ、南ベトナムに駐留して米軍の撤退についてどう思うか。

答 あちらの提案は、まだ具体的に検討していないのでよくわからない。第二点は軍事的な問題です。米軍撤退によって、ベトナムにすぐ平和がもどるならよいが、撤退してもベトナムに平和がもどるかどうかわからない。だから撤退問題とは別に、政治的な解決をしてもらいたい。

真崎貞夫（毎日放送） 北ベトナムの仏教団体と連絡のようなものがありますか。

答 全然連絡はありません。

質問 世界宗教平和会議の一月も前に来日されたのは？

答 一九六六年手榴弾だけがをしたが、気候の替わり目などに痛むので日本で治療するために会議の一月前に来日したわけです。

質問（日経） 仏教徒は宗教をひろめるために戦争をしなかったといわれたが、私の感じでは、仏教が他の宗教にくらべて余り政治に関与しなかったことが一つの原因だと思う。卒直に聞きたいが、今ベトナムの仏教徒が、ベトナム戦争反対という政治にタッチしていることは、望ましいことと思っておられるのか、それともこういうことにはたずさわりたくないが、今のベトナムの苦しい状態をみるにみかねてやらざるを得ないのかどうか。第二は、仏教徒としてイスラエルとアラブの中近東の紛争についてどうい感情をもっておられるのか。

答 第一の点は仏教徒は政治活動はしたくない。仏教の坊さんは政治参加は禁止されている。しかし現在

までの仏教徒の運動は、たとえば火事の家の中にすんでいるから外へ向かって生命があぶないとよびかけているようなものです。だから政治活動ではない。何とか助けてくれとよびかけるのは、政治ではない、政治はお坊さんのやることではない。仏教の信者は、参加するかもしれないけれども、仏教の僧侶は参加したくない。仏陀が禁止しています。

第二点は、非常に残念な問題です。しかし現在はアラブ難民は生活できないので国連や全世界の責任で救済するのがいいのじゃないかと考えます。

Thich Thien Minh 師略歴

一九四三年 仏教大学卒、四六年八月フランス当局から逮捕（入獄四月）、四七年一月ベトナムの疑いで逮捕（四、五月入獄）、釈放後仏教社会で活躍していたが、六三年仏教徒とゴ・ジン・ジエム政権が対立したため、ゲン・カオ・キ内閣の時、暗殺計画によって手榴弾を脚にうけ、一年以上入院する。六九年三月また逮捕され重労働十五年の刑をうけたが、十月末仮釈放され現在に至る。アンクアン寺派化導院長で、全国の青年仏教徒の指導者。

クラブ・ルームでの食事のご案内

会合などで、あらかじめ弁当、食事などをお申し込みにくれば、つぎの料金でご準備いたします。

和食弁当（なだ万） 一、〇〇〇円より
 寿司（なか田） 一、〇〇〇円より
 洋食 一、五〇〇円より

そのほか、緊急の場合はルーム・サービスをうけることができます。

ゲスト エルサルバドル サンチエス大統領

日本の援助に感謝

改革途上のサルバドル

昭和45年10月3日(土)

帝国ホテル(クラブ・ルーム)

私が日本に参りましたのは今度で三回目ですが、サルバドル国民を代表して日本の国民の皆様にごあいさつ申し上げます。

ただいま私は佐藤首相とこの記者会見の前にあつてサルバドルと日本の関係、とくに経済関係、また教育分野の日本とサルバドルの関係、また企業の協力について話してまいりました。また私は佐藤首相に対し、日本が技術分野においてサルバドルが今必要としている援助を与えて下さっていること、工業大学の先生などに対して援助していただいていること、それから日本青年海外協力隊の体育隊員の人々がサルバドルの体育の教育にあたって下さっていることに対してお礼を申し上げて参りました。経済分野に関しては、日本の投資家がサルバドルに投資しておりますが、非常に歓迎されております。サルバドルの国でも便宜をはかっております。私は日本の投資家がサルバドルの投資家と協力してサルバドルの発展に寄与してくれるものと思っております。そういうことを通じて日本と

サルバドルの関係がより緊密になるものと信じております。

日本とサルバドルは非常に似ておりまして、たとえば人口密度も高く、——サルバドルは人口密度がアメリカ大陸中で一番高い——自然資源というものにはめぐまれておりませんので、日本と同じように一層サルバドルの発展のために寄与するのは人間であります。そういう意味からも日本が今まで通ってきた過程というものに興味をもち、日本のようにわれわれもそういう方向をとって発展することが一番よい方法だと思っております。現在サルバドル政府が行なっております三つの改革、教育上の改革、農業上の改革、行政上の改革ですが一番重点をおいているのは、教育の改革で、これはそろそろ完成されるころに来ております。農業改革、行政改革というものは、今、はじめているところですよ。

江尻(新聞協会) 教育の改革とはどういう内容のものか。

答 教育の状態というのは、前に先生が本を読みまして、生徒はそれをきいてそれを記憶するというのに重点がおかれました。つまり、先生が皆に話して生徒はそれをきいておぼえることでしたが、今はお互いにやりとりして勉強するというような状態になっております。

教育の目的と申しますのは、青年や子供たちを、サルバドルが今必要としている国民にするということですよ。中等教育と初等教育の分野において、主に改革をいたしました。が、とくに中等教育におきましては、前は教育の方法は一つ、つまり先生が、本をよみ、生徒はそれをきいて覚えるという方法でしたが、今は工業、商業、漁業、農業、芸術など多くの分野に分かれております。この中等教育を終了しますと、ただちに生産に従事することができまして、サルバドルの発展に寄与することができるようになります。

初等教育については、前は六年でしたが、今は期間が九年になりました。教育は無料です。十四歳から十六歳で教育を終了し、より上の学校に進みたいものは中等教育の方に進むこととなります。またすべての子供たちが、少なくとも初等教育を受けることができるように学校を人口密度によって各地に建設しました。ほかの教育の上の変化を申しますと、テレビジョンを活用していることです。サルバドルの地勢はテレビを活用する上に非常に有利で、このテレビを使ってすべての人に勉強する機会を与えました。この方法をもって先生たちの教育というのを補足しております。

質問 中米共同市場の見通しと隣国ホンデュラスとの紛争について……。

答 ではまず中米共同市場について申し上げます。



左よりマヨルガ官房長官、アルマンド・インテリアノ経済大臣、サンチェス大統領、岡本通訳、前田事務局長、ハウレギ大使

これは非常にむずかしい複雑な問題ですが、中米と申しますのは、もとは一つの国です。今はたくさんの方に分れておりますが……。将来統合するという理念をもちまして、はじめ、中米共同市場において経済的な統合というものはかっておりますが、積極的には政治的にも統合するということを目的としております。

この中米共同市場は、先のホンデユラスとの悲劇的な事件がありまして、一時危機に瀕しましたが、より適切な方法をもって、この統合を進めて発展に寄与しなければいけないと思えます。つぎにサルバドルと、ホンデユラスの紛争ですが、ホンデユラスにはサルバドルの国民がたくさん住んでおりますが、ホンデユラスにおいて農業改革が始められまして、その名目の下にサルバドルの国民を迫害し、苦しみ、国から逃げ出さ

なければならぬような状態にいたのです。初めサルバドルのジャーナリズムはこれが大きな紛争になることをおそれて、この事実について知らせないでおり、この状況をやらせようとする努力がなされました。また私個人といたしましても、ホンデユラスの大統領と電話で話しまして、このようなことが続きますと大きな紛争になるのではと申したのでありますが、彼等はその手段をとらずホンデユラス国民のサルバドル人に対する迫害、暴行は強くなり、彼等がサルバドルの国境内に逃げこんできました時は、非常に悲惨な状態でありまして、まともなことができないような状態でした。それでわが国では、彼等の暴挙に対して、いかりがわき上り、私共としてはああいう行動をとることになったのです。サルバドルとホンデユラスは兄弟の国ですので、私たちは憎しみをもって彼等に對抗したのではなくて、世界の人たちに人間特有の権利をおかしてはならないということを知りたいという気持ちもございました。

私も中央アメリカを一つの国として考えているのです。ホンデユラスの国の中にサルバドルの国民が住んでいたことはたしかですが、これは侵略ということでは決してありません。サルバドルはホンデユラスを侵略する国土拡張主義者ではありません。あのサルバドルとホンデユラスの紛争を通じ、私たちは現実的な手段をとりました、現在ホンデユラスからサルバドルの人たちをひきあげております。

(通訳 岡本恵美子)

Fidel Sanchez Hernandez 大統領略歴

一九一七年七月 生れ

一九三四年～三八年 陸軍士官学校

一九四五年 陸軍大学校入学 米国 Fort-Knox 機甲学校に学ぶ

一九五四年 在仏大使館駐在武官

一九五八年～六〇年 第一三連隊長

一九六〇年 在米大使館駐在武官

一九六二年七月 内務大臣に就任

一九六七年 共和国大統領に就任

「原爆記録」映画に銀賞

日本紹介映画のコンクールで、「ヒロシマ・原爆の記録」が銀賞を贈られた。この映画は、さきに日本記者クラブの肝入りで試写会をもち、「原爆」の日の八月六日に公開されたものである。またこのコンクールは、海外映画普及協会と映像文化制作者連盟の共催で、毎年開かれており、既に十四回目を迎えている。三十分以内の英語版映画の中から、日本の海外PRに役立つ優秀作品を選ぶわけだが、こんどのように、戦争や原爆に直接関係するドキュメンタリー映画が選ばれたことに注目したい。来月中旬までに、日本の六大都市で他の入選映画とともに上映される予定である。

お願いノ

映画試写会の際、試写券を希望されて、実際に試写会にこられない方が、最近多くなって参りました。試写券は先着順に枚数制限をして、お送りしております。この点をよくお含みの上、お申しこみください。

日本記者クラブへのごあいさつ

日本記者クラブ誕生一周年に当たり、日本外国特派員協会の会長として、お祝いの言葉をお送りできることを、たいへんうれしく思います。

日本記者クラブは、その創設の年に、明らかに大きな成功を収めました。そして外国特派員協会の皆さまの同僚は、貴クラブが今後さらに発展をするよう、祈っております。

われわれは、貴クラブが今日まで、貴クラブ主催の記者会見をわれわれ外国人記者にも公開するよう配慮されてきたことを、高く評価しております。われわれは、今後ともこうした配慮が続けられるよう希望いたします。そしてわれわれとしては、外国特派員協会で行なわれるプレス・ランチョンを日本人

日本外国特派員協会会長

ジョン・リッチ

記者にも開放するといふ従来からの方針を、将来とも守っていくつもりであることを、お約束します。日本記者クラブは実にみごとな発足をし、日本の新聞界が必要としていたナショナル・プレス・クラブとしての役割りを、果たしつつあります。日本のニュースをカバーするために当地に滞在しているわれわれ外国の報道関係者は、われわれの最も重要な情報の多くが、われわれの同僚、すなわち日本の新聞記者から得られることを、知っております。われわれは、われわれと日本記者クラブとの社会的、職業的関係を、今後よりいっそう密にしていきたいと、希望しております。

もう一度、誕生日おめでとうございます。

会員総会は十二月十日

日本記者クラブの本年度会員総会を、十二月十日(木)午後四時から帝国ホテル本館三階「鶴の間」で開催いたしますので、各社代表または代表代理の方はご予約おき願います。

議事

決算報告

予算承認

役員改選

その他

創立一周年祝賀懇親会

十二月十日(木)午後五時から(約二時間の予定)日本記者クラブ創立記念懇親会をクラブ・ルームで開催いたします。全会員の出席をお待ちしておりますので、万障おくりあわせの上、ご出席ください。会費は不要です。

年末年始の休業のお知らせ

クラブ・ルームは年内は十二月二十八日(月)までで、二十九日(火)から一月四日(月)まで閉室いたします。新年は一月五日(火)正午から開室いたしますのでご利用ください。

十一月の行事

- 2日(月) 午後1時、2時30分、3時50分
ベトナム戦争記録映画「燃える戦線」試写会 松竹映配試写室
 - 午後3時30分～5時30分 ニューヨーク・タイムズ論説主幹 オークス氏懇談茶会(クラブ・ルーム)
 - 6日(金) 午後4時 第12回理事会 (")
 - 9日(月) 午前10時～10時30分 キプロス大統領マカリオス大主教記者会見(芝白金迎賓館「孔雀の間」)
 - 正午～午後2時 第13回企画委員会(クラブ・ルーム)
 - 11日(水) 午後3時30分～5時30分 ドイツ・レーベンシュタイン教授講演会(")
 - 17日(火) 午前9時30分～10時15分 シンガポールリー首相記者会見(")
- 十二月の行事
- 10日(木) 午後4時～5時 会員総会 帝国ホテル「鶴の間」
 - 午後5時～7時 創立一周年祝賀懇親会(クラブ・ルーム)